

 退職者のひとこと



左から、高瀬文化遺産部長、巽副所長、岡村企画調整部長、光谷年代学研究室長、安田埋蔵文化財センター長

33年間を振り返って

1975年4月に入所し、配属された研究室は、計測修景調査室(当時)で、室長は牛川喜幸氏、室員に田中哲雄氏、高瀬要一氏、研究補佐員として福原まり花さんがいた。また、当時埋蔵文化財センターにおられた今は亡き伊東太作氏、庶務課の渡辺康史氏、考古第一調査室の佃幹雄氏らに目をかけてもらったりしたことが、大変なつかしく思い出される。

緊張した面持ちで初めて研究室に顔を出した日、田中さんからいきなり足のサイズを聞かれ、ビックリした。それは、当時、研究所で盛んであったサッカー部への無言に近い誘いであった。



還暦祝いのユニフォームで高瀬文化遺産部長と

大雨のなか、牛川さんの後任室長の安原啓示氏と2人だけでサッカーボールを蹴り合ったこともなつかしく思い出される。

研究面では、計測修景調査室にいた5年間、平城宮跡の発掘調査に従事するかたわら、写真測量の手伝いで沖縄のグスクや奈良県五條市の町並み、鳥取城の石垣調査などに同行したことなど、楽しい現場ばかりであった。しかし、1979年の秋には、その後の人生を大きくかえる出来事があった。当時の所長、坪井清足先生から、突然「オイ。光谷、デンドロをやらないか。」と言われたのに始まる。これは、年輪年代学の研究をやるようにという、御達しであった。1980年4月からは埋蔵文化財センターに移り、年輪年代学の研究を本格的に開始した。当初、田中琢先生や佐原真先生の叱咤激励を受けたのも、今では思い出深い。年輪年代法が今日のように確立できたのも奈文研にいたからできた研究だと思っています。今後とも、奈文研の大いなる発展を期待します。

33年間もの長きにわたって、皆様からいただいたご厚情に対し、ここに心より感謝申し上げます。

(埋蔵文化財センター年代学研究室長 光谷 拓実)